

第1章 序 章

第1節 調査に至る経緯と経過

昭和49（1974）年1月、宇土市立鶴城中学校の改築移転計画に伴い、その移転用地として宇土城跡¹⁾の所在する独立丘陵（通称：西岡台）をあてることが市関係機関の協議で決定した。当地は「宇土城跡（西岡）」として昭和47年12月23日に市の史跡に指定されていたため、宇土市教育委員会が主体となり49年3月から51年3月まで発掘調査を実施した。

調査の結果、古墳時代前期の首長居館を囲む大規模な壕跡、宇土城跡の主郭・千畳敷を圍繞する横堀跡や掘立柱建物跡をはじめとする数多くの遺構を検出し、古墳時代や中世を中心とする多量の遺物が出土した。これを受けて遺跡保存の気運が高まった結果、宇土城跡は恒久的に保存されることとなり、中学校移転計画は中止されて史跡公園として保存する方針が打ち出された。

昭和54（1979）年3月12日の官報告示により、宇土城跡は国史跡に指定され、56年度には保存整備の基本計画である『史跡宇土城跡環境整備計画』を策定し、同年度より保存整備工事に着手した。

本計画では、宇土城跡を第1～5ブロックに地区割し、ブロックごとに遺構表示や休憩施設などの整備方針をまとめた。第1ブロック（西岡神宮北側地区²⁾）では、掘立柱建物跡の遺構表示やベンチ設置（昭和57年度）、東屋建設（58年度）などを行い、平成元年度におおむね整備工事が完了した。

第2ブロック（千畳敷及び周辺地区）の保存整備に関しては、平成元年度より着手したが、その動きが本格化したのは9年度からである。同年度には、学識経験者や文化庁、県文化課担当職員などで構成される史跡宇土城跡保存整備検討委員会（以下、委員会）が発足し、委員会の指導・助言のもと、宇土城跡の調査成果や歴史的背景、歴史公園としての位置付けを考慮した整備を現在まで進めている。

また、第2ブロックの整備にあたり、『史跡宇土城跡環境整備計画』の内容を見直す必要が生じたため、委員会で協議を重ね、平成10年度に主として第2ブロックの整備方針を定めた『史跡宇土城跡保存整備基本計画書』を策定した。

第2ブロックの主な整備施設を列举すれば、千畳敷を圍繞する横堀の復元（9・10・13・15・17年度）、16・17号建物跡の遺構表示（11年度）、東屋として休憩施設を兼ねた19号建物跡の整備（12年度）、トイレ建設（14年度）、案内サインの設置（15年度）、城門や柵の復元整備（17年度）などで、17年度に同地区の整備をおおむね完了した。

また、平成19年度からは第3ブロック（三城及び周辺地区）の保存整備工事に着手するとともに、委員会の指導・助言のもと、20年度には第3ブロックを中心とする基本計画書を策定した。第3ブロックについては、北側や南側に民家が近接することから、当初の3ヵ年度（19～21年度）は雨水排水処理などの防災的な工事を優先的に実施した。22年度より三城において遺構表示などの整備工事を開始し、掘立柱建物跡（22・23年度）、導水状遺構や土塁跡の整備（23年度）などの遺構の整備工事を実施したほか、解説サインの設置（22・23・25年度）のほか、三城及び周辺の植栽（張芝）を行った。なお、第4・5ブロックの整備は、全体計画（短期・中期・長期）のなかで長期計画に位置づけられており、26年度には当地区に繁茂する竹を中心に樹木伐採を行った。28年度以降、年次計画に基づき保存整備工事を行う予定である。

上述した本城跡の保存整備を目的として発掘調査を開始したのは、平成2年度に千畳敷で実施した第

4次調査からである。現在まではほぼ毎年調査を行っており、千畳敷において多数の掘立柱建物跡を検出したほか、虎口や城門跡、横堀跡、竪堀跡の発掘調査を実施した。これらの調査によって、千畳敷の横堀跡が未完成であったことや、虎口周辺部で石塔を用いた城破り跡を確認するなど注目すべき成果が得られている。その内容については、報道機関への発表や現地説明会の開催、発掘調査報告書の刊行、宇土市立図書館郷土資料室における出土品の展示などを通じて一般に公開している。なお、平成18年度より保存整備に伴う発掘調査時に体験発掘や城跡ウォーキングを毎年1回実施しており、宇土城跡を広く周知する取り組みもあわせて展開している。

本書は、これまで実施した計27次にわたる発掘調査（平成26年度現在）のうち、史跡宇土城跡保存整備事業に伴い平成21～24年度に実施した第22～25次発掘調査の報告書である。なお、当該調査は、史跡整備に伴う発掘調査であることから、表面検出を基本とし、遺構埋土の掘削は遺構保護の観点から極力おさえることとした。

第2節 調査の組織（敬称略、役職名は当時）

－発掘調査（第22～25次）及び1次整理作業（洗浄・注記・接合）－（平成21～24年度）

調査主体 宇土市教育委員会

調査責任者 木下博信

調査事務局 教育部長 山内清人（21年度）、高木恭二（22年度）、山本桂樹（23・24年度）

文化課長 高木恭二（21年度）、坂本純至（22～24年度）

文化財係（組織改編に伴い24年度より文化係）

松下敏親（課長補佐兼係長：21年度）、中園静子（主幹兼係長：22年度）、松田安代（主幹兼係長：23年度）、船田元司（課長補佐兼係長：24年度）、湯野良子（参事：21・22年度）、藤本貴仁（参事：22～24年度）、宮崎幸樹（主事：21・22年度）、平田睦美（主事：23・24年度）、士野雄貴（非常勤職員：21・22年 ※発掘調査・1次整理作業担当）、芥川博士（技師：23・24年度 ※発掘調査・1次整理作業担当）

発掘調査作業員

安達求・石上春代・内田博美・奥村美栄子・小畑律子・河野充矢・木村博敏・境泰司・下村政博・高橋勝利・田中国義・中川道治・中村洋・西村和子・橋本カズエ・橋本チエ子・福田フミエ・藤浦義磨・古山節子・村山艶子・山田カツエ（社団法人宇土市シルバー人材センター）

1次整理作業員

境美和・春川香子・山口陽子（文化課非常勤職員）

－2次整理作業（実測・トレース）・報告書作成－（平成26年度）

責任者 教育部長 木下博信、浦川 司（後任）

事務局 教育部長 前田保幸

文化課長 木下洋介

文化係 赤澤憲治（主幹兼係長）、宮邊幸子（参事）、藤本貴仁（参事 ※2次整理作業・報告書作成担当）、九谷景子（参事）、芥川博士（技師）

表1 宇土城跡（西岡台）発掘調査の経過（アミ部分は今回報告）

年度	回数	調査地点	主な検出遺構	特記事項
昭和49・50年度	1次	千畳敷周辺、三城周辺ほか	壕跡（古墳時代）、横堀跡・溝跡・掘立柱建物跡・柵跡・門跡・土坑墓・道路状遺構（中世）	市立鶴城中学校移転計画に伴う発掘調査。古墳時代の首長居館と中世城跡の重複を確認。古墳時代首長居館の確認は全国で2番目。調査成果を受けて中学校の移転中止。
51年度				『宇土城跡（西岡台）』本文編・史料編刊行。
62年度	2次	三城周辺	柵跡・溝跡（中世）	遺跡状況把握のための発掘調査。『宇土城跡（西岡台）』Ⅱ刊行。
63年度	3次	三城周辺	掘立柱建物跡（中世）	遺跡状況把握のための発掘調査。
平成2年度	4次	千畳敷北東側、同東側登道	掘立柱建物跡・溝跡（中世）	保存整備に伴う発掘調査開始。以後継続する7次までの千畳敷の調査で、重複する多数の掘立柱建物跡を検出。
3年度	5次	千畳敷南側	掘立柱建物跡・虎口跡（中世）	千畳敷において、平面プラン「L」の字形の切通し状を呈する虎口を確認。
4年度	6次	千畳敷北西側、同南西側帯曲輪	壕跡（古墳時代）、掘立柱建物跡（中世）	
5年度	7次	千畳敷西側、同東側及び北側帯曲輪	横堀跡・溝跡（中世）	虎口前面の横堀跡から大量の石塔残欠出土。
6年度	8次	千畳敷東側、同西側及び東側帯曲輪	虎口跡	
9年度	9次	千畳敷南側平場、同西側帯曲輪	壕跡（古墳時代）、堀跡（中世）	千畳敷及び周辺地区の遺構表示開始。
10年度	10次	千畳敷北側帯曲輪	横堀跡・開渠状遺構・竪堀跡（中世）	千畳敷北側横堀跡で小間割（掘削単位）確認。掘削途中で中止されたことが遺構の状態や埋土の堆積状況から判明。掘削途中の中世城の堀跡が確認されたのは全国初。宇土城跡で初めて鉄砲玉出土。竪堀跡を初めて検出。
11年度	11次	千畳敷東側帯曲輪	横堀跡・竪堀跡（中世）	大規模な竪堀跡を検出。『宇土城跡（西岡台）』Ⅲ刊行。
12年度	12次	千畳敷東側帯曲輪	竪堀跡・虎口跡・門跡（中世）	千畳敷の虎口路面は、地山掘削面をそのまま路面とするⅠ期と盛土整地上面とするⅡ期の2時期存在したことが判明。Ⅱ期に伴う門跡を確認。『宇土城跡（西岡台）』Ⅳ刊行。
13年度	13次	三城南側平場	溝跡（近世以降?）	史跡指定地に隣接する個人住宅建設に伴う発掘調査。
	14次	千畳敷北東側、同南東側帯曲輪	壕跡・方形張出し（古墳時代）、横堀跡（中世）	虎口前面の堀から多量の石塔残欠出土。これを意図的に地山土を多量に含んだ土砂で虎口周辺の堀を埋めていることが判明。5・12次調査の成果をあわせ、虎口周辺で行われた城破りと考えられる。石塔を用いた城破りを九州では初めて確認。また、1次調査で確認された千畳敷南東側の張出しと同規模・同形態の張出しを同南東側で確認。『宇土城跡（西岡台）』Ⅴ刊行。
14年度	15次	千畳敷北東側、同南側帯曲輪	壕跡（古墳時代）・竪堀跡（中世）	古墳時代の首長居館の規模をほぼ確定。千畳敷北東側の竪堀跡が丘陵裾部まで延びる可能性高まる。『宇土城跡（西岡台）』Ⅵ刊行。
15年度	16次	千畳敷北側、同南東側、南西側帯曲輪	竪堀跡・横堀跡（外堀）（中世）	10次調査で検出した竪堀は千畳敷北側に向かって延びることが判明。同北東側の竪堀の規模・深さをトレンチ調査で確認。『宇土城跡（西岡台）』Ⅶ刊行。
16年度	17次	千畳敷北西側帯曲輪	竪堀跡（中世）	千畳敷北西側で大規模な竪堀跡を検出。『宇土城跡（西岡台）』Ⅷ刊行。
17年度	18次	千畳敷南側平場、同東側帯曲輪	横堀跡・竪堀跡（中世）	千畳敷東側で竪堀跡を検出。
18年度	19次	三城南側帯曲輪、同南東側帯曲輪	道路状遺構・溝跡（中世）	三城南東側で側溝を伴う道路状遺構、同東側平場で三城から段下の帯曲輪へ続く溝跡を検出。『宇土城跡（西岡台）』Ⅸ刊行。
19年度	20次	三城南西側帯曲輪	ピット（中世）	
20年度	21次	三城東側帯曲輪	掘立柱建物跡（中世）	三城東側に隣接する帯曲輪で掘立柱建物跡を検出。『宇土城跡（西岡台）』Ⅹ刊行。
21年度	22次	三城北側帯曲輪	ピット（中世?）	
22年度	23次	三城北西側帯曲輪	土坑（中世?）	21～23次調査の結果、三城直下の帯曲輪は東側が遺構密度が高く、西側に向かって希薄になることが判明。
23年度	24次	三城東側帯曲輪	堀状遺構（中世）	北東方向に延びる堀状遺構を検出。『宇土城跡（西岡台）』Ⅺ刊行。
24年度	25次	三城南東側帯曲輪	道路状遺構・柵列跡（中世）	1次・19次調査で検出した道路状遺構を確認。『国指定史跡宇土城跡（西岡台）』一第2ブロック（千畳敷及び周辺地区）保存整備工事報告書を刊行。
25年度	26次	「カラホリ」南端部	横堀跡（中世）	「カラホリ」と呼称される城跡西側の大規模な横堀跡の調査に着手。『宇土城跡（西岡台）』Ⅻ刊行。
26年度	27次	「カラホリ」南端部及び北端部	横堀跡（中世）	「カラホリ」北端部において現地表より2m余りの深さで堀底を検出。『宇土城跡（西岡台）』ⅩⅢ刊行。

2次整理・報告書作成作業員

山口陽子・廣瀬恵子（文化課非常勤職員）

―史跡宇土城跡保存整備検討委員会―

平成21～24年度 北野隆（委員長，熊本大学名誉教授〔工学博士〕），千田嘉博（奈良大学文学部文化財学科教授），稲葉継陽（熊本大学文学部附属永青文庫研究センター教授）

平成26年度 北野隆，稲葉継陽，鶴嶋俊彦（熊本城調査研究センター文化財保護主幹），山尾敏孝（熊本大学大学院自然科学研究科教授），田中尚人（熊本大学政策創造研究教育センター准教授），田代周史（熊本県立第一高等学校教諭），丸目公一（西岡神宮宮司），城本和博（轟地区振興会会長）

―調査指導及び協力者―

市原富士夫・青木達司・山下信一郎（文化庁記念物課），大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館），丸山伸治・坂井田端志郎・能登原孝道・木庭真由子・福田匡朗（熊本県教育委員会），中山圭（天草市教育委員会），濱口俊夫・吉田恒・根本なつめ・辻誠也・佐藤伸二（宇土市文化財保護審議会）

註

- 1）西岡台の東約500mには，キリシタン大名・小西行長が築城した近世宇土城跡（城山）が存在していることから，通常，中世の宇土城跡は「宇土城跡（西岡台）」や「宇土古城」などと呼ばれている。本書では特別のことわりが無い限り，「宇土城跡」とは「中世の宇土城跡」を指すものとする。
- 2）『史跡宇土城跡環境整備計画』では，第1～5ブロックそれぞれにおいて具体的な地区名称を設定していなかったが，平成10年度策定『史跡宇土城跡保存整備基本計画書』において，ブロックごとに地区名称を付したことから，本書ではカッコ書きで当該名称を示すこととする。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境（図1）

熊本県宇土市は、県沿岸部のほぼ中央から西に向かって突出する宇土半島の北側から基部にかけて位置する。市域は東西約24.8km、南北約7.6km、面積約74.20㎡である。

宇土半島は北に有明海、南に八代海と面し、半島先端には天草諸島が連なる。半島内は山がちで、平地の割合は少ない。半島を構成する山地は、主峰の大岳（477.6m）を中心とする大岳火山系山地と三角岳火山系山地とに分けられる。また、半島基部には若干の平地を挟んで木原山（雁回山、314.4m）が存在する。周辺の基盤となる地質は、安山岩類や凝灰角礫岩などの大岳由来の火山岩類が主である。

市の北側には、熊本県三大河川の一つである緑川と、その支流である浜戸川が東西に流れており、流域には両河川によって形成された沖積平野が広がっている。宇土半島基部では、東西から迫る山塊によって平野が狭まり、南の八代平野に抜ける道が限られることや緑川の河口に近いことなどから、宇土半島基部は古来より陸上・海上ともに交通の要衝であった。

宇土城跡は、この沖積平野南西部の通称「西岡台」と呼ばれる独立丘陵（標高約40m、東西約750m、南北約400m）を利用して築かれている。周辺には、縄文時代から歴史時代まで数多くの遺跡が分布しているが、これらについては、これまで刊行した宇土城跡に関する調査報告書に記載しているため本書では割愛する。

第2節 宇土城跡に関する歴史（図1，表2）

宇土城跡は中世宇土に拠点を置いた在地領主の宇土氏・名和氏の居城である。「三宮社記録」によれば、永正3（1048）年に築城され、以後、菊池氏の一族が相次いで宇土城に在るとの伝承があるが、それを具体的に証明する同時代の文献や考古学的根拠は残されていない。一方、廃絶時期は小西行長が宇土城主になった翌年、近世宇土城跡（城山）の工事に着手した天正17（1589）年から関ヶ原の戦いで敗死した慶長5（1600）年の間と推察され、発掘調査で出土した陶磁器の年代もほぼ対応している。

宇土氏は肥後国守護菊池氏の一族とされる在地領主で、宇土を本拠として宇土郡一帯を知行しており、宇土庄の根本領主ないし庄官に出自を持つと考えられる。宇土氏が史料上に初めて現れるのは、元徳2（1330）年6月5日の鎮西下知状で、宇土高俊が登場する。高俊は宇土庄を本拠とし、正平3（1348）年、征西將軍懷良親王を宇土津に迎え入れており、南朝方として活動した人物であった。明和元（1390）年から翌年にかけて、九州探題の今川了俊は、肥後国南部の南朝方勢力に総攻撃をかけ、宇土城は了俊の攻撃によって落城したが、宇土氏自身は了俊に降参、それによって本領の宇土を安堵された。

南北朝の合一後も引き続き本拠を維持したとみられるが、高俊以後、宇土氏に関する文献資料は宇土為光が登場する文明4（1472）年まで途絶え、その間の系譜については明らかではない。為光は菊池氏全盛期の肥後・筑後守護であった持朝の子で、宇土忠豊の養子となって宇土氏の家督を継承した人物である。文亀元（1501）年の菊池氏直轄領家臣団の内紛に伴って失脚した菊池能運に変わり、為光は3年にわたり守護の地位にあったが、文亀3（1503）年、相良氏や阿蘇氏らの協力を得た能運は、為光とその子重光、嫡孫の宮満丸を殺害、これによって宇土氏は滅亡し、能運は肥後国守護として復活したのである。



図1 宇土半島から同基部にかけての中・近世城跡分布図 (1/100,000)

一方、名和氏は代々伯耆国長田邑（鳥取県西部）を領した有力武家である。名和氏と肥後国との関わりは、鎌倉幕府滅亡の際の勲功の賞として、名和義高へ八代庄が与えられたことに始まるが、名和氏の一族が本国での劣勢を背景に八代に移住するのは1350年代末頃である。正平13（延文3、1358）年には、義高の甥である名和顕興（名和長年の孫）は、この地に一族を伴って移ったとされ、南朝方として活動した。以後、八代を中心として南北に勢力をおよぼしたが、文亀4（1504）年、名和顕忠は本拠地である古麓城（八代市古麓町）を菊池氏や相良氏によって追われ、宇土と至近距離にある守富庄の木原城（熊本市南区富合町）に移り、その後、宇土氏滅亡後の宇土城に入った。顕忠が宇土城に入ることができた背景には、直前まで宇土を支配していた宇土為光の娘婿であった顕忠が、領主を失った宇土の土豪や領民に受け入れられやすい存在であったとみられている。

名和氏が宇土城に入った後も相良氏との間に争いは絶えず、相良領と名和領の境目である豊福領（宇城市松橋町）をめぐり幾度となく争ったことが、相良氏八代支配時代の記録史料である『八代日記』から知ることができる。豊福領の帰属は、長享元（1487）年から永禄8（1565）年まで、80年足らずの間に名和氏と相良氏との間で9回も入れ替わっており、その攻防の激しさがうかがえる。豊福の位置は、名和氏の宇土、阿蘇氏の益城、相良氏の八代と3つの郡の境目に位置し、また甲佐と宇土半島を結ぶ道と八代から隈本へ向かう薩摩街道とが交錯する場所でもあり、軍事・交通の要所だったことがその争いの背景とみられる。

また、『八代日記』によれば、長く阿蘇氏の所領となっていた宇土半島郡浦庄に位置する網田（宇土市）と郡浦（宇城市三角町）の領有権が、天文19（1550）年に阿蘇惟忠から名和行興に割譲されるなどしたが、基本的には本地域は戦国末期まで阿蘇大宮司の支配が継続していた。

名和氏に関する文献史料や石塔の銘文などが示すその領域支配は、郡浦庄を除く宇土郡、益城郡や八

表2 宇土半島から同基部における主な中世城跡

名 称	所在地	標高 (m)	主郭規模 (m) (長軸×短軸)	主な遺構	出土遺物	備 考
阿高城跡	熊本市南区城南町	88	95×16	堀切・堅堀・土橋・溝状遺構・集積遺構	土師器皿	1995年、旧城南町教委による発掘調査。
木原城跡	熊本市南区富合町	140	30×13	帯曲輪・堅堀・土橋	青磁・播鉢（瓦質土器？）	主郭西側に幅10m、南北38mの曲輪。主郭北側の「小城」にも東西32m、南北14mの曲輪。
高城跡	宇土市松山町	95	14×10	帯曲輪・土塁・堅堀	－	「コタカジョウ」と呼ばれる尾根西側に畝状堅堀群とみられる連続する堅堀。
宇土城跡 (西岡台)	宇土市神馬町	39	65×50	横堀・堅堀・掘立柱建物跡・門跡・土橋・柵列・道路状遺構	土師質土器、瓦質土器、中国製陶磁器（青磁・染付など）	主郭「千畳敷」西側に東西65m、南北35mの曲輪「三城」が位置。その西側に「カラホリ」と呼ばれる大規模な横堀。
白山城跡	宇土市神合町	218	60×40	帯曲輪・堀切・土橋	－	城跡南東麓の神山地区に、白山神社（名和行興建立）と光園寺跡毘沙門堂が位置。
田平城跡 (網田城跡)	宇土市上網田町	20	210×105	横堀・土塁・堀切・土橋	瓦質土器（播鉢・火鉢）、中国製染付、丸形彈丸石製鋳型	古墳（城1・2号墳）を土塁として利用。
大岳城跡	宇土市上網田町	477	－	土塁状遺構・帯曲輪状遺構	－	宇土半島最高峰の大岳頂上に位置。頂上部に東西95m、南北40mの緩斜面有り。
雄岳城跡	宇土市下網田町	348	47×17	堅堀・帯曲輪	－	下網田町雄嶽の通称「ジョウビラ」に位置。
矢崎城跡	宇城市三角町	23	80×50	帯曲輪・堀切	－	城地西側の浦には「船津」地名が残る。
群浦城跡	宇城市三角町	79	70×22	帯曲輪・横堀・土塁	－	主郭南西部先端にも連続した横堀が存在した可能性が高い。



図2 宇土城跡縄張り図 (1/3,000, 1974年測量図などを参考に作成)

代郡の一部地域（木原や豊福）に限られていたといえよう。これらの地域には、名和氏時代に存在したとみられる田平城（網田城，宇土市上網田町）・阿高城（熊本市南区城南町）・矢崎城（宇城市三角町）などの中世城跡が残されている。

天正15（1587）年，豊臣秀吉の九州平定によって名和顕孝は宇土城を開城した。その後，顕孝は筑前小早川隆景のもとに替地を命じられ，肥後との関係が断たれた。

顕孝による宇土城開城の翌年，小西行長は肥後南半（益城・宇土・八代の三郡）14万6千石の領主として宇土城に入ったが，翌年には隣接する台地上において新城の築城（近世宇土城跡）に着手し，間もなく西岡台の宇土城は廃城となったとみられる。朝鮮出兵後，行長は慶長5（1600）年の関ヶ原の戦い



図3 千畳敷周辺検出遺構集成図（1/1,000）



図4 三城周辺検出遺構集成図 (1/1,000)

に伴って刑死したが、近世宇土城は加藤清正によって領有・改修された。本丸や堀跡の発掘調査で、城破りに伴うとみられる故意に破壊された石垣や門跡を検出し、大量の瓦や貿易陶磁器が出土している。

第3節 縄張りとは発掘調査について（図2～4）

宇土城跡の主な曲輪は、西岡台丘陵の東西に並んだ二つの高位部に所在する。

東側が「千畳敷」と呼ばれる曲輪で、その規模や城郭遺構の密度などから当該曲輪は主郭に位置づけられている。標高約37m、東西約50m、南北約65mの規模を有しており、その周囲を横堀（約234m）が囲繞している。曲輪やその周辺から、発掘調査によって多くの掘立柱建物跡・門跡・柵列跡・虎口跡・横堀跡・縦堀跡を検出した。

一方、西側の曲輪は「三城」と呼ばれ、標高約39m、東西約65m、南北約35mの規模を有する曲輪であるが、千畳敷のように曲輪を囲繞する横堀は存在しない。発掘調査により掘立柱建物跡・門跡・道跡、溝跡を検出した。これらの曲輪は、周囲に土地を削り出して急峻な崖状地形や帯曲輪を造り出して防御性を高めている。

千畳敷や三城周辺の発掘調査によって、大量の土師質土器や播鉢・火鉢などの瓦質土器、備前焼・瀬戸焼などの国産陶器、中国製の白磁・青磁・染付や華南三彩、タイや朝鮮半島製の陶磁器など、13～16世紀代を中心とする遺物が出土した。

三城の西側約50mには、地元で「カラホリ」と呼ばれている大規模な横堀跡が南北方向に配置されている。規模は長さ約310m、幅約10～15m、深さ約5～7mで、その西側に平行して高さ約2mの土塁がある。この横堀跡は、堀底に側溝を有し、南端付近から門礎とみられる巨石が出土していること、中世以来の古道である三角道と交わることから、平時には堀底道として機能していたと推測される。現在のカラホリは道路で途切れているように見えるが、現地踏査の結果や昭和49年の地形図から判断すると、現在より南へ100m程度延びていたと推定され、カラホリ東側の防御を考慮しての造作とみられる。

カラホリが三城付近だけでなく、西岡台南麓まで延びているのは注意すべきことであり、特定の曲輪に限らず城全体を意識した堀の配置は、いわゆる「惣構え」の考え方に通じるものといえよう。カラホリの東側には陳の前遺跡（弥生時代～中世）があり、宇土城に関連した遺跡と推定される。おそらく神馬町字西岡、同字日平、同字馬場下、石橋町字陳の前周辺に、領主や家臣団の居住域が形成されていたとみてよいだろう。

千畳敷や三城で検出した建物跡は全て掘立柱建物跡であり、礎石建物跡は発見されていない。また、2間×数間程度の建物が多数を占めており、小規模かつ等質的で瓦もほとんど出土していない。このことから、領主の屋敷が曲輪内に存在したとは考え難いことから、名和氏の居館は丘陵南側に存在したとみられる家臣団の屋敷群と隣接して築かれていたと想定される。

引用・参考文献

- 阿蘇品保夫 1977「肥後における名和氏と宇土氏」『宇土城跡（西岡台）』本文編 宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集 宇土市教育委員会
- 稲葉継陽 2007「戦国期の城と地域社会」『新宇土市史』通史編第2巻 中世・近世 宇土市
- 宇土市史編纂委員会編 2002『新宇土市史』資料編第2巻 宇土市
- 2003『新宇土市史』通史編第1巻 宇土市

- 宇土市教育委員会 1977『宇土城跡（西岡台）』本文編 宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集
1981『宇土城跡（城山）』宇土城跡城山調査概報Ⅰ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第4集
1982『宇土城跡（城山）』宇土城跡城山調査概報Ⅱ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第7集
1985『宇土城跡（城山）』宇土市埋蔵文化財調査報告書第10集
1985『西岡台貝塚』宇土市埋蔵文化財調査報告書第12集
1988『宇土城跡（西岡台）』Ⅱ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第18集
2001「石ノ瀬遺跡」『新宇土市史基礎資料』第9集
2003『宇土城跡（西岡台）』Ⅵ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第24集
2004『宇土城跡（西岡台）』Ⅶ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第25集
2005『宇土城跡（西岡台）』Ⅷ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第26集
2007『宇土城跡（西岡台）』Ⅸ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第29集
2009『宇土城跡（西岡台）』Ⅹ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第31集
2012『宇土城跡（西岡台）』Ⅺ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第33集
2014『宇土城跡（西岡台）』Ⅻ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第34集
宇土城跡三ノ丸跡発掘調査団 1982『宇土城跡三ノ丸跡』弥生時代前期のV字溝と近世城郭遺構の調査
鶴嶋俊彦 2013「宇土名和領の中世城」『うと学研究』第34号 宇土市教育委員会

第3章 平成21年度（第22次）発掘調査

第1節 調査の概要

（1）調査の概要（図5）

第22次調査は、平成21（2009）年10月から翌年1月にかけて実施し、三城北側の帯曲輪を中心に計3地点で発掘調査を行った。調査面積は計158㎡で、内訳は2201区：33㎡、2202区：80㎡、2203区：45㎡である。

21次調査に引き続き、22次調査は三城周辺の帯曲輪の遺構確認を主目的とした調査である。21次調査では、三城東側帯曲輪を対象地として発掘調査を実施した。264㎡という比較的限られた面積の調査であったが、果樹の植え込み跡とみられる掘り込みによって調査区全面に攪乱を受けていたものの、掘立柱建物跡を12棟（SB24～SB35）検出した。これらの多くは重複しており、計7時期にわたり建物が存在したことが明らかとなった。このことから、同地において恒常的に建物が立地していたと考えられる。

一方、22次調査では、2区で掘立柱建物跡の可能性のある遺構を検出したほか、1区においてピット群を検出したが、三城東側帯曲輪と比較して遺構密度が非常に低く、住居や倉庫などの構造物を配置する空間として重点的に利用された痕跡は確認できなかった。

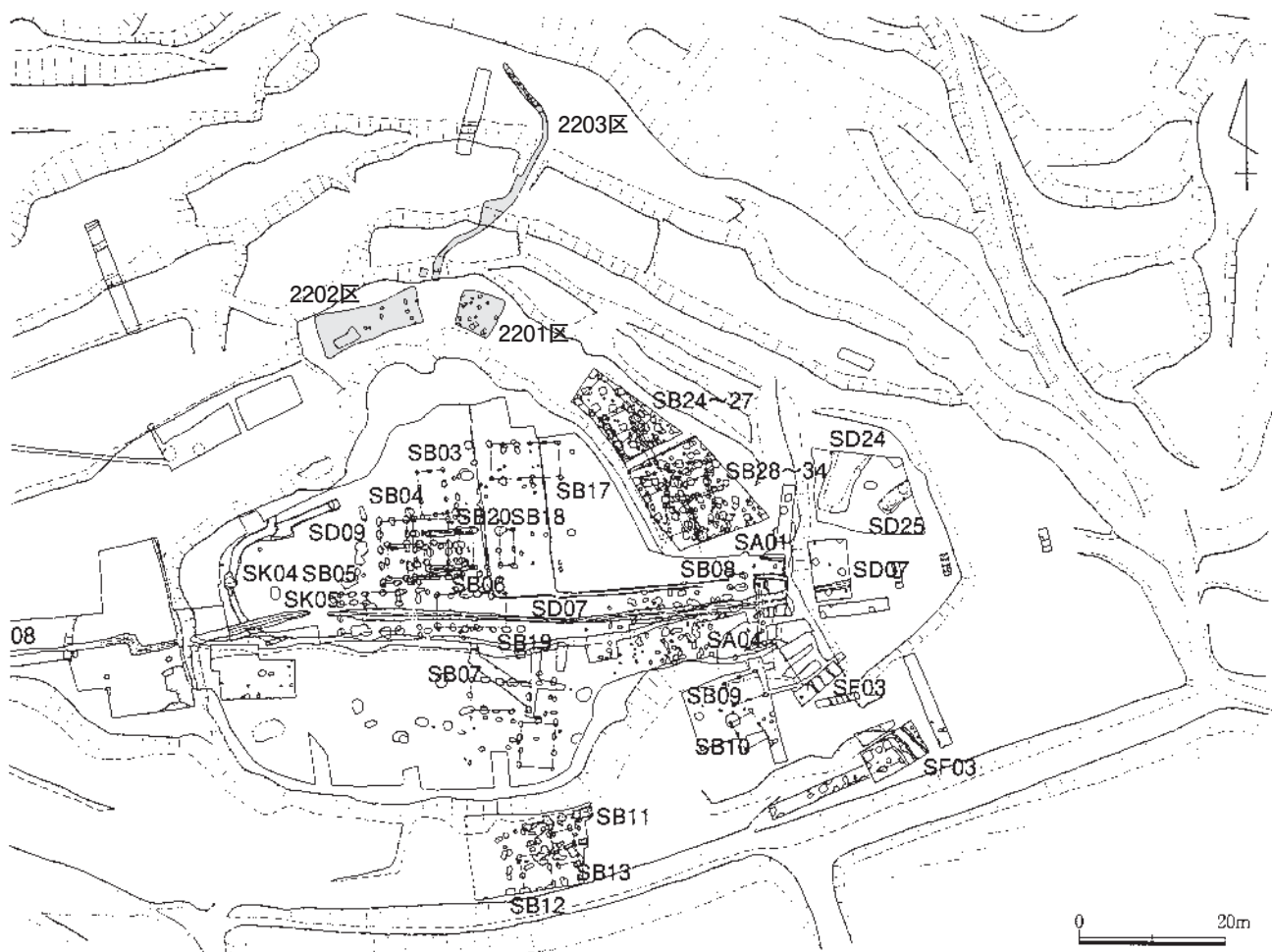


図5 22次調査区配置図（1/1,000，アミ部分：22次調査区）

以上の調査の結果、遺構埋土や遺構外より土師質土器（坏・皿・碗）や須恵器（甕）、瓦質土器（捏鉢・擂鉢など）、中国製陶磁器（青磁・白磁・染付など）、近世の国産陶磁器（肥前系）、基石状石製品などが出土した。なお、後述する本章第3節に掲載している出土遺物以外は小片のため図化していない。

（2）調査日誌抄

平成21（2009）年		状況，2203－2区遺構検出状況	
10月28日	重機による表土除去開始。2203－2区平坦面で石垣検出（1号石垣）	12月1日	2201区において整地層確認。
29日	グリッド杭設置	2日	2202区にて遺構検出。
11月2日	2203－1区斜面部より2号石垣検出。	7日	2号石垣の確認のため，2203－1区を拡張。
3日	第4回体験発掘を実施（参加者34名）。	8日	調査区写真撮影。
4日	2201区包含層掘削開始。	14日	遺構実測作業開始。
16日	2203－3区平坦面より遺構を検出。	17日	調査器材搬出。
25日	2201区で遺構を検出。写真撮影（1号石垣検出	平成22（2010）年	
		1月15日	実測作業終了。

第2節 調査区の概要

2201区（図6，図版1）

三城北側直下に位置する帯曲輪に設定した調査区であり，21次調査区の北西約20mの距離にある。22

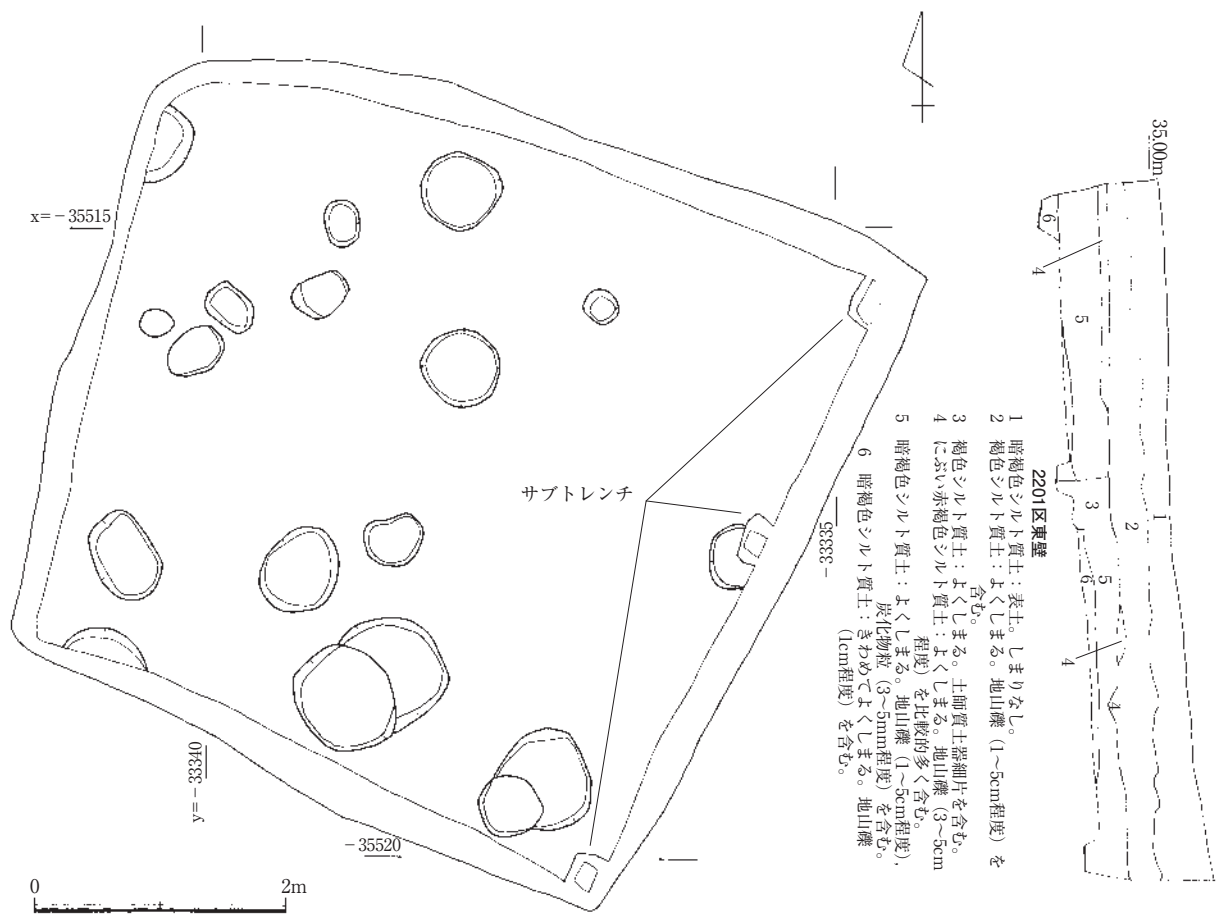


図6 2201区遺構配置図及び土層断面図（1/60）

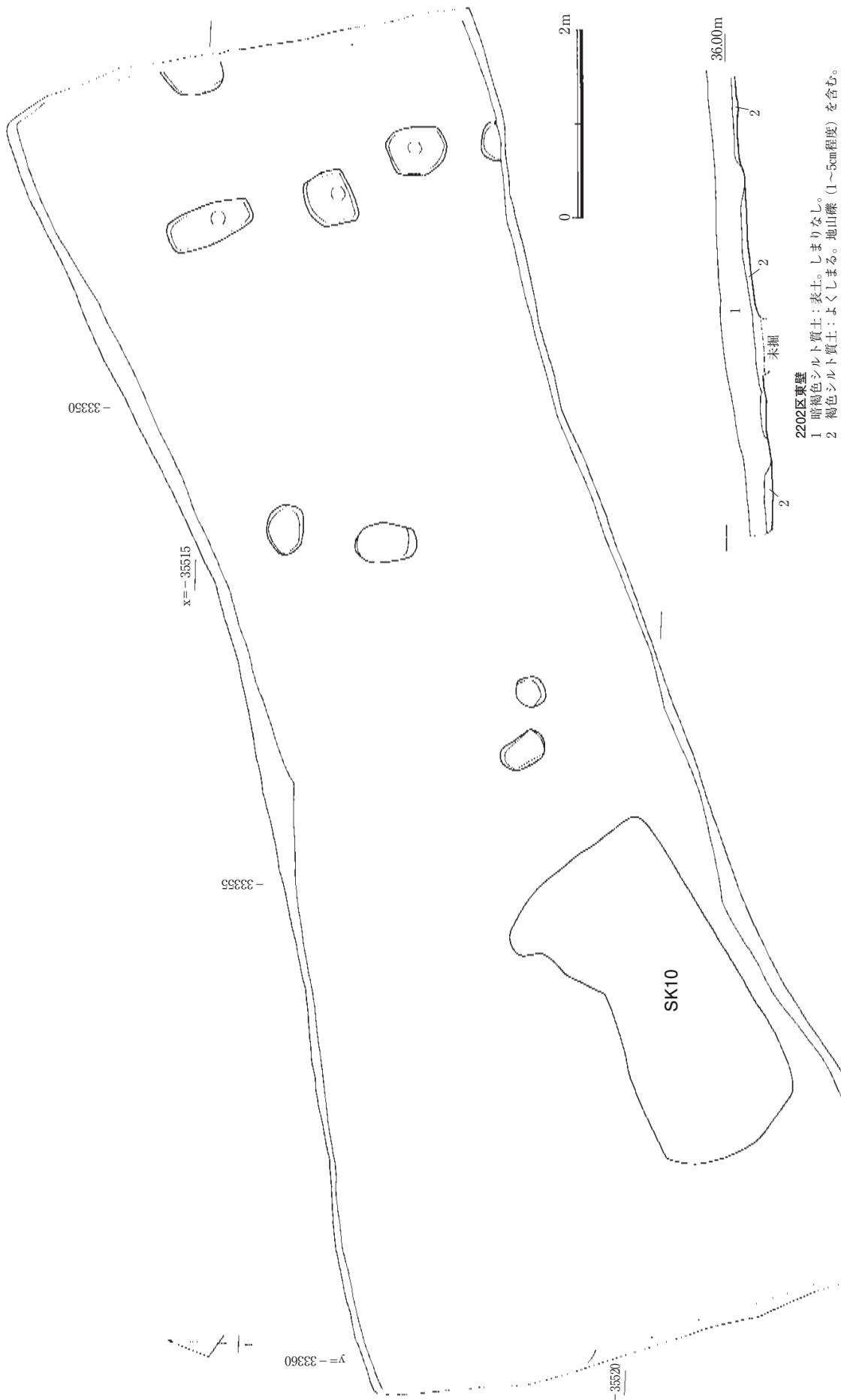


図7 2202区遺構配置図及び土層断面図（1/60）

次調査において最も層序の遺存状況が良好だったのは本調査区である。重機により表土を除去し、遺物包含層を人力で掘り下げ後、遺構検出作業を行った。

その結果、整地層の可能性のある硬化層を2層確認したが、下層の硬化層は部分的であった。また、散在的に広がるピットを18基検出したが、うち6基が樹痕とみられ、調査区内において掘立柱建物跡や柵列跡などの遺構は確認することができなかった。これらのピット群の大半は、下層の硬化層上面及び地山面から検出した。

表土層や遺物包含層より、土師質土器の坏・皿、瓦質土器（須恵質）の鉢、中国製青磁碗・皿、中国製白磁皿、碁石状石製品（灰白色・灰黒色）などが出土した。

2202区（図7，図版1～3）

2201区西隣に設定した調査区である。2201区とは対照的に表土層と遺物包含層の堆積があまりなく、現況グラントレレベルより約15cm下で地山面に達するが、これは調査区の大部分が近現代の耕作に伴い削平されたためと考えられる。

調査の結果、ピット状遺構9基（うち4基は樹痕とみられる）、土坑状遺構SK10を1基検出したのみで遺構密度が希薄である。このうち、調査区東側で検出した3基に直径約14～16cmの柱痕跡らしきプランを確認し、北北西－南南東方向に主軸をもつ掘立柱建物跡の可能性はあるが、柱筋も直線的ではなく、柱穴間も揃っていない。また、2201区で確認した2面の硬化層（整地面？）のどちらに属するものであるかも不明である。

表土層や遺物包含層より、土師質土器の碗や瓦質土器の捏鉢、須恵器甕、古銭などが出土した。

2203区（図8，図版3・4）

2201区と2202区の間から北側へ延びるトレンチ。平成21年度施工の雨水排水工事に伴う遺構確認のため、三城北側に位置する帯曲輪や切岸に設定した。なお、本調査区は、南北方向に広範囲におよぶことから、南より2203－1区、2201－2区、2203－3区と計3つの小区に区分した。

2203－1区 2201区・2202区が位置する帯曲輪直下の切岸で石垣（2号石垣）を検出した。野面積み石垣であり、不定形の自然礫を用いている。本石垣には、しまりのない土がまず堆積し、その後にしまりのある粘質土主体の土層が覆っている。切岸の傾斜角と比較して土層の傾きは緩やかである。なお、石垣の続きを確認するため調査区の約1m西側切岸を部分的に調査したが（2203－1'区）、この地点では石垣は検出できなかった。切岸の高さは約1m、傾斜角は40°～60°程とばらつきがある。

2203－2区 2203区の間付近に設定した。調査区に並行する形で石垣（1号石垣）を検出した。本石垣は、わずかな裏込め石を伴う野面積みの石垣であり、根石が良好に残存しており、一部に割石を用いて割面を西向きに揃える。石垣の石材に明瞭な矢穴跡を残すものが1石、やや不明瞭な痕跡があるものが1石の計2石を確認した。1～2段しか遺存していないため判然としないが、ほぼ垂直に石材を配置している印象を受けることから、それほど高い石積ではなかったと推察される。

当該調査区に位置する切岸の高低差は約2.5m、傾斜角は約50°。2203－1区と異なり、表土の堆積は少ないが、巨大な転石を含んだ粘質土主体の層が層序の中間にあり、1号石垣を被覆している。

2203－3区 2203区北側に設定した調査区で、2203区の各帯曲輪で唯一遺構を伴う。細長い溝状遺構やピットなど複数の遺構を検出したが、遺構保護の観点から埋土の完掘は行っていない。表土下に砂

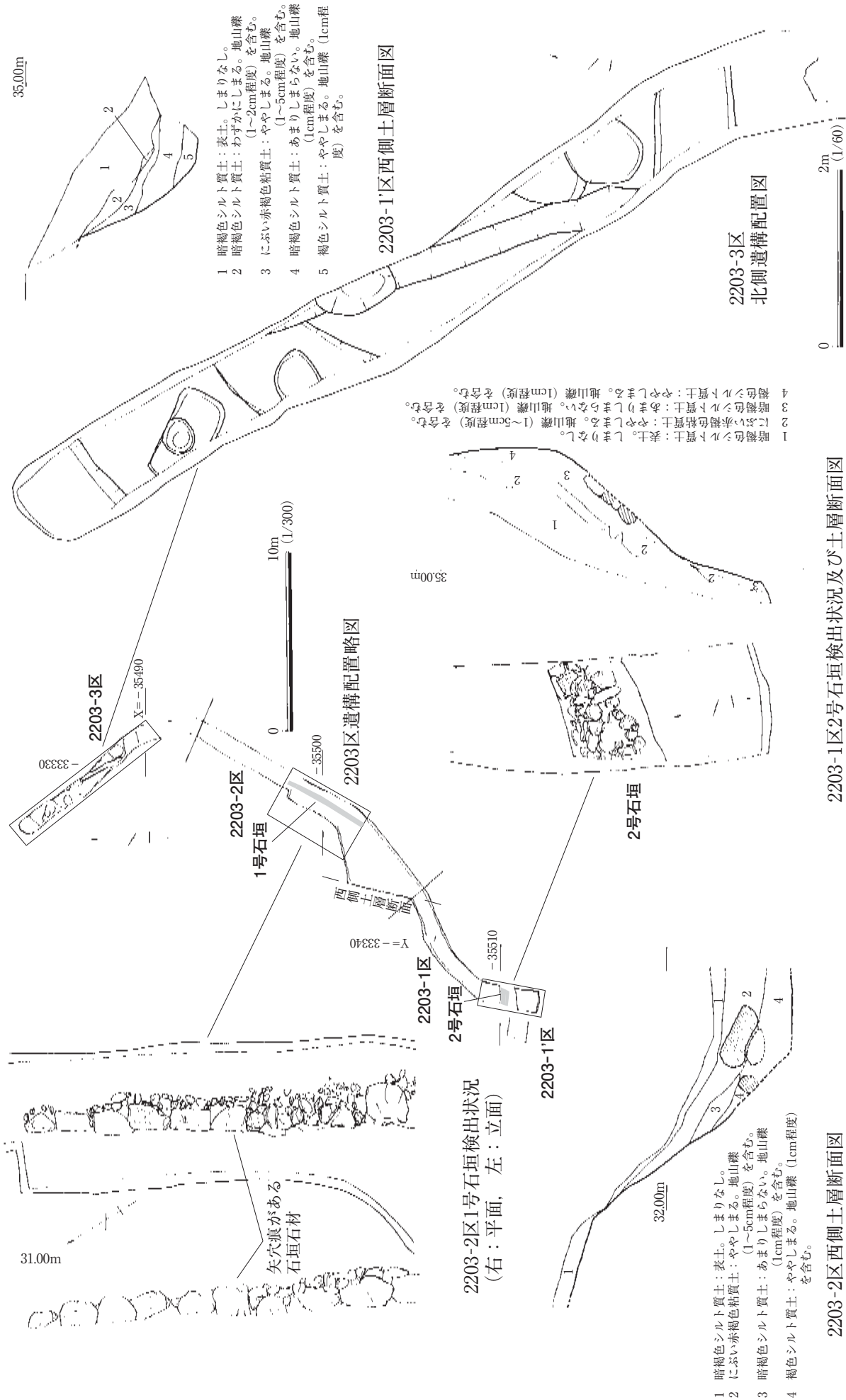


図8 2203区遺構配置図及び土層断面図（遺構配置略図は1/300，その他は1/60）

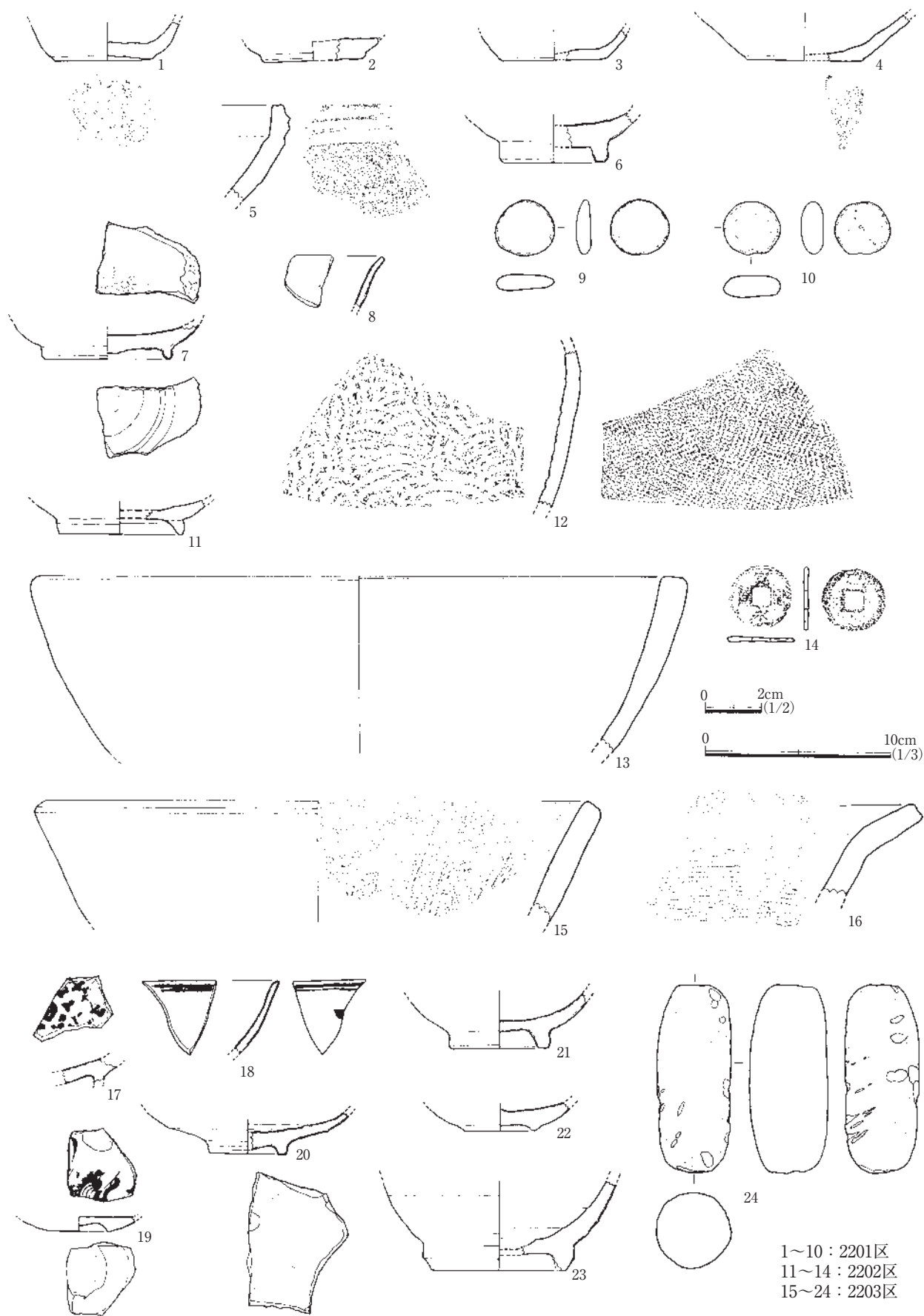


図9 22次調査出土遺物（9・10・14は1/2，その他は1/3）

礫を含んで、しまりのない旧耕作土層とみられる褐色土層と同様の埋土を有するプランがいくつかみられ、比較的新しい遺構を含むようである。

第3節 出土遺物

遺構外出土遺物（図9，表3，図版5）

2201区 1～4は土師質土器で，1～3は坏，4は皿。口縁部を欠損している。以前の調査で出土した資料と同様に，磨耗により器面調整が不明なものを除き，法量の大小に関係なく全ての資料で内面及び外面は回転ナデ，底面は糸切り離しを施す。2の底面には，指頭押圧痕が認められる。5は瓦質土器の鉢で，硬質である。6～8は中国製陶磁器。6は14世紀後半～15世紀中頃の龍泉窯系青磁碗である。7も同じく14世紀後半～15世紀中頃の龍泉窯系青磁皿で，見込みに文様を施す。8は13世紀～14世紀中頃のいわゆる口ハゲの白磁皿である。9・10は不整円形の碁石状石製品で，ほぼ同大である。9は粘板岩製で，灰黒色を呈しており，10はチャート製で，灰白色を呈している。9・10とも表面は丁寧に研磨を施す。

2202区 11は土師質土器の碗で，高台は粘土紐貼り付け後に整形している。12は須恵器の胴部片で内面に当て具痕がある。13は瓦質土器の捏鉢である。14は古銭（寛永通宝）で「□永通□」の文字が判読できる。

2203区 15・16は瓦質土器。15は播鉢で，5本単位の播目を施す。16は鉢で，口縁部が「くの字」状に屈曲する。17～19は中国・景德鎮窯系の染付で，17・18は碗，19は皿である。17は見込みがくぼむ「蓮子碗」で，16世紀前半～同中頃の製作。18は16世紀後半～17世紀初頭のもので，口縁部内外面に界線をめぐらす。19は見込みに文様を施す碁笥底の皿で，16世紀代の製作。20は1600～1630年製作の肥前系とみられる灰釉皿で，見込みに砂目痕がある。21は在地産の可能性のある鉄釉碗で，17世紀代か。22は1590～1610年代の肥前系陶磁の皿で，見込みに胎土目積みの痕跡が残る。23は17世紀末～18世紀前半の肥前系陶磁の瓶か壺とみられる。24は砂岩製の棒状石製品で，表面は比較的丁寧に研磨を施す。

表3 22次調査出土遺物観察表

2201区遺構外出土遺物										
挿図 No	実測 No	種 類 器 種	胎土・材質	焼成	色 調	器面調整・技法などの特徴	層位	①口径②器高③底径 ④重量[cm・g] ※(復元値)〈残存値〉	備 考	
1	22-1	土師質土器 坏	1mm以下の砂粒	やや不良	内外:にぶい黄橙	内:回転ナデ 外:摩耗のため不明	包含層 下層	② 〈2.1〉 ③ 5.3	底部糸切離し	
2	22-2	土師質土器 坏	石英、角閃石、1mm 程の砂粒	やや不良	内:にぶい褐 外:橙	内外:摩耗のため不明	包含層 下層	② 〈1.1〉 ③ 5.7	底部糸切離し、底 面に指頭押圧痕	
3	22-22	土師質土器 坏	角閃石、石英、1mm 程の砂粒	やや不良	内外:浅黄橙	内外:摩耗のため不明	表土層	② 〈1.7〉 ③ (6.0)		
4	22-23	土師質土器 皿	1mm未満の砂粒	良好	内外:浅黄橙	内:回転ナデ、ナデ 外:回転ナデ	検出面 直上	② 〈2.5〉 ③ (6.4)	底部糸切離し	
5	22-24	瓦質土器 鉢	角閃石、石英、1～ 2mm程の砂粒	良好	内:黄灰 外:灰黄	内:ケズリ、ナデ 外:ケズリ、ヨコナデ、ナデ	包含層 下層	② 〈5.2〉		
6	22-3	青磁 碗	緻密	良好	釉:明オリーブ灰 胎:にぶい橙	内:施釉 外:ケズリ、施釉	包含層 下層	② 〈2.6〉 ③ (5.8)	龍泉窯系	
7	22-16	青磁 皿	緻密	良好	釉:灰オリーブ、にぶい橙 胎:灰白	内:施文、施釉 外:ロクロケズリ、施釉	包含層	② 〈1.9〉 ③ (7.0)	龍泉窯系	
8	22-21	白磁 皿	緻密	良好	釉:灰白 胎:灰白	内:施釉、ナデ 外:施釉	検出面 直上	② 〈2.8〉	中国製	
9	22-4	碁石状石製 品	粘板岩	－	内外:灰色	全体を研磨	包含層 下層	直径2.0～2.1、最大 厚0.6④3.6		
10	22-5	碁石状石製 品	チャート	－	内外:灰白色	全体を研磨	包含層 下層	直径1.9～2.0、最大 厚0.7④4.5		
2202区遺構外出土遺物										
挿図 No	実測 No	種 類 器 種	胎土・材質	焼成	色 調	器面調整・技法などの特徴	層位	①口径②器高③底径 ④重量[cm・g] ※(復元値)〈残存値〉	備 考	
11	22-7	土師質土器 碗	角閃石、長石、1mm 程の砂粒	良好	内外:にぶい黄橙	内:回転ナデ 外:摩耗のため不明	包含層	② 〈1.9〉 ③ 6.5		
12	22-6	須恵器 甕	緻密	良好	内外:褐灰	内:青海波文(当て具痕)、 外:タタキ	包含層	② 〈8.6〉		
13	22-9	瓦質土器 捏鉢	角閃石、石英、1mm 程の砂粒	やや不良	内:浅黄橙 外:黄灰	内外:摩耗のため不明	包含層	① (35.2) ② 〈9.4〉		
14	22-8	古銭	青銅	－	青緑	－	包含層	直径2.3、厚さ0.2④ 3.4	寛永通宝	
2203区遺構外出土遺物										
挿図 No	実測 No	種 類 器 種	胎土・材質	焼成	色 調	器面調整・技法などの特徴	層位	①口径②器高③底径 ④重量[cm・g] ※(復元値)〈残存値〉	備 考	
15	22-12	瓦質土器 擂鉢	角閃石、石英、1mm 程の砂粒	良好	内:灰白、にぶい橙 外:浅黄橙、にぶい橙	内:ヨコナデ、ナデ、描目 外:ヨコナデ、ナデ	包含層 下層	① (30.2) ② 〈6.6〉	2203-3区	
16	22-13	瓦質土器 鉢	角閃石、石英、1～ 2mm程の砂粒	良好	内外:灰黄	内:ケズリ、ヨコナデ 外:ナデ、ヨコナデ	包含層 下層	② 〈4.8〉	2203-3区	
17	22-15	染付 碗	緻密	良好	釉:明青灰 胎:灰白	内外:施釉	包含層 上層	② 〈1.2〉	2203-3区、景德鎮 窯系	
18	22-19	染付 碗	緻密	良好	釉:明緑灰 胎:灰白	内外:施釉、施文	包含層	② 〈4.0〉	2203-3区、景德鎮 窯系	
19	22-20	染付 皿	緻密	良好	釉:明緑灰 胎:灰白	内:施文、施釉 外:ロクロケズリ、施文、施釉	排土中	② 〈0.8〉 ③ (3.0)	2203-1区、景德鎮 窯系	
20	22-11	灰釉 皿	緻密	良好	釉:灰オリーブ 胎:灰	内:施釉 外:ロクロケズリ、施釉	包含層 下層	② 〈2.3〉 ③ (4.2)	2203-3区、肥前系	
21	22-10	鉄釉 碗	緻密	良好	釉:黒褐 胎:黒	内外:施釉 高台端部に砂目痕	包含層 下層	② 〈3.1〉 ③ (5.3)	2203-3区、在地産 か	
22	22-17	陶器 皿	緻密	良好	釉:灰オリーブ、灰褐 胎:にぶい黄橙	内:施釉 外:回転ナデ、施釉	包含層 下層	② 〈1.5〉 ③ 4.0	2203-3区、肥前系	
23	22-18	陶器 瓶?	緻密	良好	釉:にぶい黄褐 胎:にぶい赤褐	内:回転ナデ、施釉 外:回転ナデ	石垣内	② 〈4.9〉 ③ (8.0)	2203-2区、肥前系、 壺の可能性有	
24	22-14	棒状石製品	砂岩	－	黄褐色	表面を研磨	包含層	長さ10.1、最大径 4.2④25.2	2203-3区	